

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

● 巻頭エッセイ MOOCという新種の「学び」が拓くもの..... 1	● 授業の玉手箱..... 4
● 第2回「英語の教え方教室」合宿・勉強会 in 長浜報告..... 2	● 書籍紹介『日本人に相応しい英語教育』..... 4
・ 基調講演..... 2	● 第30回勉強会「英語の教え方教室」簡易報告..... 4
・ グループ討論①、グループ討論②..... 3	● 第32・33回勉強会「英語の教え方教室」の予定..... 4

巻頭エッセイ MOOCという新種の「学び」が拓くもの

東條 加寿子

“ムーグ”というのは怪物の名前のように聞こえる。今、未知の「学び」の仕組み“ムーグ”が、世界で広がりつつある。ムーグ(MOOC)とは何か、従来の「学び」の仕組みとどう違うのか。MOOCというボーダレスな教育を手掛かりに、次世代の「学び」について考えてみたいと思う。

MOOCとは Massive Open Online Course の略語で大規模公開オンライン講座のことを指し、2012年にアメリカでスタートした。通常、数週間で学べるコースにオンライン登録し、オンラインで授業を受講しながら、課題や試験に取り組み、合格すれば修了証を取得することができるという新しい大学教育の仕組みである。受講は無料で、現在世界中で約1000万人がMOOCで学んでいるといわれる。登録のために国籍や職業や年齢が問われることはなく、モンゴルの16歳の少年がMIT(Massachusetts Institute of Technology)の機械系の講座を受講し、試験を満点で修了、現在MITの正規学生になっている事例は有名である。MOOC誕生の背景には、遠隔授業とOCW(Open Courseware)の流れがあるといつてよい。遠隔授業は時空の制約を克服した教育の配信を実現し、2002年にMITが着手したことに始まるOCWは、講義の動画配信をはじめ講義シラバスや課題・試験に至るまで、大学教育コンテンツを一気に世界に向けてオープンにした。現在、MOOCはCourseraと呼ばれるStanford大学など100以上の大学(講座数約650)が参加するものと、edXと呼ばれるMITやHarvard大学など約30大学(講座数約150)が参加するものに2大別される。日本の大学の参加状況は、東京大学がCourseraで2科目を開講、2014年から京都大学がedXで講座を開講している。日本の最新の動きとしては、JMOOCが設立され、国内の大学の参加を呼び掛けている。CourseraやedXなどのglobal MOOCに対して、JMOOCはregional MOOCに分類される。講義言語としての日本語の特性を考えれば、JMOOCの存在意義は想像に難くない。

さて、MOOCから私たちはオンラインの個別学習による「学び」のスタイルを思い描くが、実はそうではない。MOOCではオンラインで学習コミュニティが形成され、受講生同士の交流が促進されるという。このことは、今や日常的なソーシャルネットワークによるコミュニティ形成過程と同様であり、講座によっては、meet upと呼ばれる“どこかに集まる授業”も企画される場合があるようだ。そして、こういった学習コミュニティの形成は、学習者のモチベーションを高め、コース修了まで学習を継続させるのに重要な役割を担っているという。学習コミュニティの形成の観点から、MOOCにおける評価の仕組みはさらに興味深い。1講座を何万人もの学習者が受講することを考えれば、

課題や試験の評価を講義担当教員一人が行うことは現実的に不可能であり、通常、受講生を巻き込んだ相互評価(ピア評価)が行われる。受講生は自分の課題を提出すると同時に、例えば5人の課題を評価することが義務付けられる、といった具合だ。講義担当者からルーブリックと呼ばれる評価の観点や評価の基準を書いた表が示されるので、受講生は講義内容を正しく理解した上でルーブリックに基づいて他の受講者の課題を評価することになる。評価し、評価される。議論が深化し、共に学ぶ学習コミュニティが形成される。

ここまでMOOCの「学び」を概観してきたが、この全く新しいオープンでバーチャルな高等教育の仕組みは、私たち一人ひとりにとってどのような意味を持つのだろうか。学習者という立場からは、MOOCは自分の意志で参加可能な夢のような学びの場である。自分の学びたいことを世界の一流の講座群から選択し、主体的に学びを進めることができる。社会人になっても学び続けることができるし、特に専門性の高い職業分野においては、知識を最新化することができる魅力的な学びの機会である。また、年齢を問わず才能のある学習者は主体的に高度の学びに挑戦することができるし、国内でJMOOCが一般化すれば、大学選びや学部(専門領域)選択に活用することができ、大学入試改革の一翼を担うことができるかもしれない。MOOCで講義を公開する大学の立場からは、MOOCによって得られるビッグデータは文字通りの“宝の山”と言われている。どのような専門領域のどのような科目をどのような学習者が受講しているのか。受講生数が万単位であれば、これらのデータから得られる情報の活用法は計り知れない。

そして、中等教育に関わっている私たちにとっては、MOOCの「学び」の仕組みが、現在、私たちの教育の現場で進められている新しい「学び」の仕組みづくりと同期していることが最も関心のあるところである。授業内容に関するビデオは予習で義務付け、授業ではその内容に基づいた協働学習やプロジェクト学習に重点を置くいわゆる反転授業(flipped classroom)は、MOOCと多くの共通点を持っている。学ぶ側に授業の主体を移し、協働して、アクティブに学ぶ。知識を提供するための授業から、学習者が主体的に関わる授業へのシフトである。

マルチメディアコンテンツの配信、ソーシャルネットワーク(SNS)の日常化などのIT技術革新が席卷する社会で、学習コミュニティの形成、協働学習、学習者主体の学び、アクティブラーニングという時代の価値観をまとった「学び」のパラダイムが形成されようとしている。“ムーグ”は異次元の怪物ではないことは確かなようだ。



第 2 回「英語の教え方教室」合宿 in 長浜 於：グリーンホテル Yes 長浜

・「ディベート発想の思考力の育成 —論理的に考えるための活動例紹介—」 中井 弘一 (大阪女学院大学)

滋賀県はもとより、京都、大阪、兵庫、奈良、三重、福井の府県から約 40 名の高等学校と中学校の先生方、院生、大学生が集まり、合宿運営幹事長の戸田先生の開会挨拶で始まった。

■ 基調講演

「ディベート発想の思考力の育成 —論理的に考えるための活動例紹介—」

1. はじめに

中井先生の基調講演では、①「なぜ今ディベートを授業に取り入れるべきなのか」という問いかけから始まり、②実際に行われている「高校英語ディベート」についての詳しい説明を頂き、③「ディベートをする上では生徒はどのような力が必要」であり、どのような方法で実際の「授業にディベートの要素を取り込んでいけるか」④ディベートに必要な「論理的な思考」とはどのような内容について、実践活動を交えて、学びました。



2. なぜ、今ディベートを授業に取り入れるべきか？

現代社会においては、以下の2つの力が必要であると説明された。

- ①他者と協同しながら「正解のない問題」に対応する力
- ②生涯にわたって学び続ける力

このような力を学校教育で生徒に習得させるには、従来の知識を習得させるだけの教育では不十分で、学んだ知識を使いこなしたり創造したりする力を育成するという社会的要求に、学校は応えていかなくてはなりません。ディベートは、現代社会の問題を論題として扱っているので、ディベートをすることで、「今勉強していることが、世の中とどう結びついているか」を実際に体験することができる (authentic learning)。これがディベートを授業に取り入れるべき理由であると。

3. 全国高校英語ディベート大会

ディベートには「パラメンタリーディベート」という形式もありますが、高校生には、「全国高校英語ディベート」の方が、流れが明確であるため、理解しやすく高校生には取り組みやすいのではと説明された。

①全国高校英語ディベートの流れ

立論→質疑→アタック→ディフェンス→総括
(論題に対して、肯定側、否定側が交互に行います。)

②言葉の定義

論題で使われている言葉をはじめに定義することで、かみあわない議論を防ぎます。

③立論の論理展開パターン

- (1) 問題解決型議論 (①深刻な問題がある→②現状では解決できない→③解決策の採用)
- (2) 制度廃止型議論 (①制度の意義がない→②制度が弊害を生んでいる→③制度の廃止)
- (3) 比較優位型議論 (①改革案採用→②大きなメリットが得られる→③現状ではメリットは得られない)

④総括について

総括の担当者は試合全体を広い目でまとめます。相手チームの議論、自分チームの議論を比較し、自分たちの議論の強さが上回っていることをその根拠を述べて主張します。

最後に、ディベートにおいて重要なことは、論理であるということです。ですから、普段の授業の中で、教員は大切なポイントに対して、正解を求める一つのことを訊くのではなく、次第に深く焦点を絞るように3段階程度で連続的に尋ねる質問を生徒に行っていく必要があることを力説されました。1つの質問では不十分なのです。一つのことが全体でどういう意味合いを持っているのか、究極の課題は何であるかを生徒に気付かせ、それに応答できる力の育成が望まれます。ディベートの中の質疑の時間を生徒に有効に使わせるためには、まず教員から連続的な発問を投げかけていく姿勢が大切です。

4. 生徒がディベートを行う上でどのような力が必要で、どのように授業に組み入れるか？

①思考力

Input-Intake-Output という指導過程の中の Intake(摂取・内在化)

における生徒が考えるステップが重要であるとおっしゃいました。ここでは、「1分間スピーチ」を紹介され、実際に、「小学校英語の是非」について議論し合う体験をしました。効果的な1分間スピーチでは、疑問→結論→理由の流れで話すことだそうです。

What to think よりも How to think を教えることが、ディベートを行う上では大切で、思考力の育成につながるのです。knowing what に留まるのではなく、knowing why, knowing how を身につけさせることが大切であるとのことでした。

問題意識を生徒に持たせることも大切です。そのために、事例 (Plastic surgery の記事等) を挙げて、考えることを生徒に訴えることが必要なのです。注意すべきことは、物事は見る角度によって違って見えるため、思い込みをしないように気をつけなければいけません。

③論理的な表現をする力

教員が話題に対する語彙を与え、生徒にそれらの語彙を整理させるという活動を授業では行うことができます。まず、論題や問題に対する語彙・知識を豊富に持たないと、論題や問題を読み取れないし、何が一番大切なことなのかを本質的に見つめることはできません。普段の授業でも、レッスンの内容に関連する語彙収集やその語彙の持つ意味をネットワークのように関連づけて説明できるような課題を考えることも有効であるとのことでした。

5. 論理的な思考をするには

STEP 1 : 必要な情報の取り出し (比較する力、分類する力、分析する力)

比較、分類、分析するために、「視座」(どの角度から見るか)、「視野」、「視点」が大切です。朝日新聞朝刊より「2色マーカーで磨く読解力」を引用され、事実をグリーンで、主張はオレンジで文章に線を引く活動を紹介されました。また、ディベートはどこにポイントを持っていくかが大切なので、「自分の観点を持つ」ことが必要だということもおっしゃいました。最後に、比較、分類、分析した後に、どのように説明するかも大きなポイントです。言い方によって、相手に伝わりやすくも伝わりにくくなるからです。

STEP 2 : 得た情報の評価 (評価する力、選択 / 判断する力)

評価、選択、判断するために、どの基準を用いるかが大切で、自分の philosophy を持たなくては行けないということでした。

STEP 3 : 自分の考えの論理を構築 (推論する力、構想する力)

自分の考えを主張するために、最低3つの観点・根拠・理由を持たなければいけないということです。一つであると、それが反論されて根拠がなくなると主張は意味をなさなくなるからです。

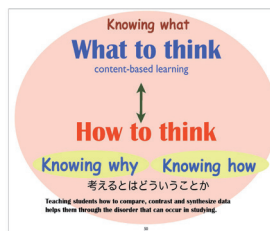
これらのことを、ペア活動などを取り入れながら説明していただきました。

6. 最後に

生徒がディベートを行うためには、論理的な思考力をつけることが必要不可欠であると感じました。中井先生の講演を通して、ディベートについての基礎を学ぶだけでなく、様々な思考力をつける活動を経験させて頂きました。教員にとって、いかに生徒に考えさせ、思考力をつけさせる活動や仕組みを授業の中に組みこんでいくことが大切なのではないでしょうか。

さて、ディベートの基礎を学んだところで、次は本番です。Are you ready to debate?

報告：坂本 美佳 (滋賀県立伊香高等学校)



■ グループ討論①：賛成反対派に分かれて論点整理

グループ①『英語の授業は英語ですべきである』

MC：小財久美（滋賀県立虎姫高等学校：2年目）

AFFの論点は①生徒のモデルになる、②コミュニケーションの場面を設定していくことこそが教師の役目であるということ。②についてはNEGから、正しく英語を話せないし、あいまいな英語による活動に終わってしまうというアタックが出た。

NEGの論点は①日本語と英語は言語構造が大きくことなるので、日本語でしっかり説明すべきだということ。それに対してAFFからは英語で考えるべきで、間違いがあってもコミュニケーション活動をするべきだと反論が出た。

グループ②『小学校英語は中高での英語学習にプラスである』

MC：熊谷向祐（滋賀県立米原高等学校：5年目）

AFFの論点は①英語学習への動機が高まる、②音声やリスニング能力が向上する、③機会均等（全ての小3からすべき）

NEGの論点①現状では指導体制が弱い、②英語を実践使用する場がない、③小中の連携がうまくいっていないであった。

NEGの①指導体制が弱いという意見は、現状の小学校教員の大量採用が原因であり、AFF側は中学校の免許も有する教員が多いので、その人たちがリーダー的になっていると反論した。またNEG②実践場面が少ないという意見に対しては、学校の授業があるので十分と反論。最後に③小中の連携の弱さについては、京都市の具体例が紹介された。具体的な例を出しながら紹介することで、議論は熱くなり、AFF側の方が説得力を増した。

グループ③『英語の授業は予習を必ずすべきである』

MC：小川真加（滋賀県立能登川高等学校：2年目）

AFFの論点は①予習によって授業のスタート地点を合わせることで授業中に何を理解すべきかなどの学習の目標をはっきりさせることができる。②授業は予習でわからないことを共有し、授業で内容を深めることができるという意見。

NEGの論点は①予習よりも復習をするべきだ。なぜかという、予習を前提としての授業では、生徒の学習具合によって差が出るからだ。生徒によって予習の差はでる。②予習は自分ですることによって間違ったことを覚えてしまう恐れがある。③英語の授業では初見で読み、その場で考える力が求められる。MCとしては否定側の意見の方が説得力があった。なぜかという、予習のイメージが人によって違うという意見に賛同できたからである。

グループ④『日本語訳のプリントを配布は必要である』

MC：堀尾美央（滋賀県立米原高等学校：6年目）

AFFの論点は①本文の内容の確認が各学習者で確認ができるので学習が促進される。②和訳の説明に費やす時間が減り、授業の効率が上がり、音読などに時間を使える。③日本語訳を見ることで客観的に英語の学習ができる。

NEGの論点は①和訳プリントを渡さないことで、授業中に緊張感が生まれる。②和訳プリントには意識が多いのでそれにとらわれてしまい、自分の日本語ではだめなのかと不安になる。③和訳プリントを配付するのでなく授業中に和訳をすることで、理解度をクラス全体でやりとりをしながら進めることができ、ついていけない子がいなくなる。

討論が一番白熱したところは、3点ある。1つめは、NEG①集中力や緊張感が生まれるという意見に対して、訳だけではなく、単語や文法の説明でも可能ではないかとAFFから反論出たこと。2つめは、AFF側の和訳を渡すことで、訳をもらえるから、心の余裕が生まれて、授業中の話を聞かなくなるのではないかとという否定側のアタック。3つめは、NEGの意識はダメなのかという議論。AFF側は意識は日本語の勉強になるのでは良いではないか、などピンポン・ディベートが続いた。全体的に和訳は「後渡し」で議論を進めていったので、先渡し、中渡しだったら議論はどのように進んだのか気になる。最後にNEG側が、紙の節約にもなるのではという意見も出て、会場は大きく盛り上がった。



グループ⑤『IT機器の活用は通常授業より効果的である』

MC：音羽顕慈（滋賀県立石部高等学校：3年目）

AFFの論点は、ビジュアル、音、情報などをすぐながせるので情報量が多くて良いという意見だった。それに対し、NEGからは量があれはよいのかという反論がでた。そのAFFの再反論で、the more, the better の一言でNEGの反論は撃沈しました。

NEGの論点は、生身の人間とのコミュニケーションが大切と主張した。ALTの活用、英語教員自身が英語で表現できることが、生徒の意欲を高めるという意見を出した。それでもIT機器のもたらす情報量は多く影響は大きいとAFFが反論した。否定側は情報量のバランスが必要だとさらに反論し、もたらす情報に真実が入っていない場合もあると強調。それに対してAFFは誤った情報を見抜くことも情報化社会では求められていると反論し、議論は延々と続いた。

報告：戸田 行彦（滋賀県立守山中学校）

■ グループ討論②：「みんなで知恵を出し合おう！授業の悩み」

討論②は、5人ずつのグループに分かれ、ディベートよりもディスカッション的な流れで進めました。

<学校教育全般について>

- ・数ある教材を生徒に適合した形で使用するためには、一教師としての堅固な教育観をもち、生徒の人格形成の使命にあふれ、優れた教育環境を構築する前向きな心が重要である。
- ・英語（や授業全般）に劣等感をもっている生徒が多い。少しでも成功体験が増えるよう、授業における質問等のハードルを低くしてその達成度を褒め、モチベーションの向上に繋げられるよう、指導方法を工夫している。
- ・来年度には新学習指導要領で学ぶ高校生が揃う。今後、小学校・中学校・高等学校のそれぞれの教員間のカリキュラム上の共通理解と日頃のコミュニケーションが益々大切になってくるのではないかと。

<英語授業について>

- ・One paragraph, One summary を実践している。学んだ内容を自分の言葉も含めて要約することで、input-output のリズムを体得させ、内容をどれだけ理解しているかを適切に確認できている。
- ・ラウンド制を導入しているが、タスクの解答に終始して時間が過ぎるのではなく、できるだけワークシート上の解答（英語）を声に出す時間の確保に努めている。また、True or False Question の質の向上も図っている。
- ・生徒による発表の時間を十分確保したい思惑から、output 活動に充てる時間をやや増やしている。input の重要性和 input との時間のバランスも考慮していかなければならないと感じている。
- ・授業において何が大切かを見極め、教科書の全 Lesson を見通して、それぞれの授業時間で何が大切かを事前に見いだしておく必要がある。
- ・All English の授業は難しいが、ただ単に「全て英語で押し進める」のではなく、授業の前にまず、生徒の理解可能な部分を精選しておくことが大切である。
- ・ペアになり、教科書で学んだ部分（例えば1ページ）を1分間で考え、30秒で内容を伝えあい、さらにその summary を家庭学習にし、提出されたものをクラス全員で共有している。好評である。
- ・Lesson のそれぞれの One Part でどのように生徒に伝えていくか、アイデアを練っておくようにしている。IT教材も効果的だが、指導内容における input と intake をどのように位置づけるのかも含め、事前に把握しておくことが大切である。

報告：中西 勝弘（滋賀県立八幡高等学校）



■ 参加者記念写真

授業の玉手箱

夫 明美

仕事柄、各地の中学校や高校を訪問して授業や講義をさせていただく機会に多く恵まれています。多くの場合は「1 回完結型」の授業をします。先日は、同じ高校の 1 年生、2 年生、英語科目ご担当の先生方に向けて、3 時間連続型の授業をさせていただきました。いずれもダイアログプレイやスピーチと言う音声を中心に実践を交えたお話をし、実際のデモンストレーションを行いました。私にとって非常に新鮮なことがいくつかありました。

一つ目は、学生と共に授業を受けてくださった先生方が、引き続き行った「教員向け」の時間中に、日頃の授業や英語指導についての疑問や困難を感じておられる点を率直に述べてくださった点です。1 時間完結型ですと、どうしても授業後は短時間のやり取りにとどまってしまう、深いところまでお話ができません。また、複数の学校から先生方が集まっておられる場所ですと、「全員が共有している教材、学生、指導法」の情報が存在せず、やはり、各先生（または各学級、各学校）が感じておられる問題点について具体的にお話しすることも難しいです。先生方が胸を開いてお話してくださったおかげで、私自身が大学での英語教育で大切にしたい点を再認識する機会にもなりましたし、現場の先生方のヒントになるような材料を準備するあらたな「やる気スイッチ」を入れていただきました。

二つ目は、私自身が 3 グループ間に一連のテーマ性をもたせて（全てご出席くださった先生方を除いては）1 時間ごとに異なるオーディエンスに向けて講義を行ったことです。学年による進度やテーマを考慮しながら資料を準備することは、骨の折れる部分もありましたが、非常にやりがいのあるものでした。

このような新しい経験から刺激を受け、以下は若干手前味噌になりますが、8 月の免許更新講座の内容の一部を紹介いたします。受講者の皆さまに同じ教材を使用していただきながら、「形式と意味、それにふさわしいコミュニケーションスタイルを表す発音」について取り上げます。音素という個別の発音からだんだんと枠組みを広げて、「情報のギャップ」や「対比」などをイントネーションや音の強弱で示すという点まで実技も含めて扱う予定です。

書籍紹介

『日本人に相応しい英語教育』

成田一（大阪大学名誉教授）（著）、松拍社（2013）1500 円、196 ページ



表紙にある副題が「文科行政に振り回されず 生徒に責任を持つ」とあり、帯には「英語での授業」「TOEFL 入試」が英語教育を壊す！続けて、言語構造的にハンディが大きい英語には日本人に合った教育方法がある！と勇ましい。

ページをめくっての、はじめの中でも、「文科省は小学英語についても誤りをおかしている。“中学の基本英語の前倒しを禁止し、表現手段を奪いながら、コミュニケーション力を育てる。”という矛盾を孕む、お遊びの英語活動を英語が苦手な担任に委ね、浅薄な国際理解という理念を掲げて、保護者を欺いている」と小気味よい。

本書の内容は「言語差を踏まえた外国語教育」、「言語習得理論について」「リメディアル教育」「どう英語を教えるべきか？」「翻訳と通訳の違い」等と幅広く 11 章構成となっており、全体を通して、理論的かつクリティカルな視線から論が展開されている。近年の日本の英語教育に対する様々な提言や答申を、そのことの是非が十分に論じられることなく施策化されることに？？疑問を抱かれる方にお勧めの一冊である。

（中垣芳隆）

第 30 回勉強会「英語の教え方教室」簡易報告

平成 26 年 6 月 14 日（土）14:00 ~ 17:00

「私の授業紹介と忍者学（Ninjalogy）」

大阪府立枚方津田高等学校 池田 裕 教諭



今回は池田先生を迎えて、「授業に英語の諺（ことわざ）を」と「忍者学」について話をさせていただきました。BS の NHK World News 出演時のビデオを見ながら皆、池田先生の話術に引きこまれました。まず授業報告として、英語の諺を 5 分間程度の帯授業として年間 100 を教えていると話された。最初にベスト 20 を紹介され、Time is money. 時は金なりを生徒に時間厳守の大切さを伝えるためにトップに教えるとのことだった。

報告のあと、授業において英語のことわざを紹介したり覚えさせたりすることはどのような意味を持つのかを参加者で話し合ってもらった。

- ・英語、英文を覚えることになり良いことではないか。
- ・英語のことわざを取り上げることが英語教育に効果的かどうかかわからない。ただ、身体を動かすウォーミングアップの時に発声させるのに使っている。その方が自然に覚えるようだ。
- ・文法指導の際に身近な出来事や活動を例文にするのもよいが、例文として可能なことわざを取り上げて使うことが良いと考える。
- ・教え込んだことわざから最終的に一つ選ばせ、それをポスター化させる。裏面にはなぜそれを選んだのかを英語で書かせる。この活動は、廊下などの掲示を通して生徒のやる気を生み出している。
- ・英語のことわざカルタをやるくらいしか扱っていない。
- ・英語のことわざを通して英語の感覚や文化を教えることができるのではないか。

などフロアーの意見を頂戴した。ポスターづくりやことわざを選んだ理由を書かせるプロジェクト活動は生徒の感情を大切にしており、「人間中心の教育」につながる。選んだ理由は、まさにその生徒の自己表出である。英語のことわざは、言ってみれば昔人の知恵である。そうした知恵を自分のものとするには意味があるだろう。そこに文化背景や英語特有の考え方があっても知れない。そうした言語文化を教えていくことは、言語教育の大きな目的の一つでもある。（中井）

「勉強会」今後の予定

■ 第 32 回勉強会「英語の教え方教室」

平成 26 年 10 月 18 日（土）14:00 ~ 17:00

「私の授業実践—英語を通じて世界を知ることをめざして」

滋賀県立米原高等学校 堀尾 美央 教諭



■ 第 33 回勉強会「英語の教え方教室」

平成 26 年 11 月 22 日（土）14:00 ~ 17:00

「エクセター大学での研修で学んだこと」

奈良県立高取国際高等学校 松川 慈 教諭

詳細は <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/course>



編集後記

今夏も教員免許状更新講習 1・2 を行う。50 名を超える参加申し込みがあり、現在キャンセル待ちだそうだ。講習担当教員、気を引き締めてがんばりたいと思う。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造 2 丁目 26 番 54 号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp